



異世界で  
ゆるゆる生活を  
満喫す  
2

Hazuki Yuna

◆ 著 葉月ゆな

◆ 絵 ガラスノ



**シエル**  
ハルトの父の従魔。

**ラウル**  
狼の獣人。  
祖国を追われて  
ハルトに出会う。

**ルアン**  
ハルトの母の従魔。  
ルチアの母親。

**ルチア**  
ルアンの娘。  
母親のもとで  
修業中。

**アルラウネ**  
世界樹の妖精。



**ハルト**  
ウエストランド家の三男。  
理想のゆるゆる生活を  
満喫するため、  
前世の知識を生かして  
魔導具を開発していく。

**カナル**  
ハルトの友人。  
ハルトにライバル  
意識を持っている。

**アトレ**  
ハルトの従魔。  
超希少な  
フェンリルの子供。

僕——リーンハルト・ウエストランドは辺境伯家の三男坊で、現在8歳だ。

7歳の頃、3兄弟で初めて領内の樹海に連れて行ってもらった際に、フェンリルの子供であるアトレと出会い、従魔契約を結んだ。

それで、アトレのネームプレートを作るために宝石店を訪ねたら……色々あって、僕が思いついた物が新商品に結びつき、そこから怒涛の商品開発が始まり、気がつけば商會を立ち上げることになってしまったんだよね。

その後、次男のジェラ兄様がAランクの魔獣フィアンマ——リプカと、長男のクリス兄様がAランクの魔獣ペンダバール——ビアンカと出会い、それぞれ従魔契約をしたんだけど、そのことで、リナルーナ王女がウエストランドへやって来て、王家にも目をつけられるように。

また、ウエストランド領に遊びに来た、クリス兄様の友人たちと樹海に行った際には、朽ちかけていた世界樹を見つけ、瀕死状態の精霊アラウネに出会ったんだ。

でも、世界樹とアラウネは、植物神の加護を持つカイル隊長の協力で無事に助けることができた。何やかんやあって、その後アラウネは3人に増殖したのだけだ……。

それからトラブルは続き、8歳の誕生日には、使用できる魔法の属性を調べるための魔力鑑定

で周囲の注目を集めてしまった。加護を2つ持っているという、前代未聞の結果が判明したんだ。それでも、魔力鑑定で一緒になったカナルと友達になり、その繋がりでも黄金の翼というBランクの冒険者パーティとも知り合いになれたのは良かったな。

かわら版やティーバッグといった、前世の知識からの発明品を僕が思いついたせいで、さらなるトラブルに見舞われ、母様の兄上、ダヴィド伯父様おじに協力を仰いだこともあったね。

それから、貴族の社交シーズンには、王家主催のお茶会に参加して、ディアンヌという伯爵家の女の子を助けるために、ちよっとした騒ぎを起こしてしまった。

とはいえ、その甲斐もあって、協力してくれた公爵家のラファエル、侯爵家のブリジット、そして助けたディアンヌと仲良くなることができた。もちろん、母様には怒られたけれど……。

あとは、ステータスを確認する方法を発見して、王城に呼ばれたりもしたね。

でもね、そのご褒美で王都図書館の書庫を訪れている最中に、【ボーナスが発生しました】というデジタル音声の頭に響き渡ったんだ。

それで僕は嬉しさと同時に嫌な予感を覚えた。とにかく石板を確認したので、急いで屋敷に戻ることにしたのだけど……。

## 第1話 教会へ

王都図書館から自分の部屋に戻った僕はさっそく石板を開く。

すると、新しく【メール】というボタンが現れていて、ボタンの右上には「①」という数字が点滅している。

【メール】ボタンを押し、メールの内容を見る。

賢者神の図書室にない本を賢者神に贈ったあなたには、ボーナスポイントが加算されました。教会にある賢者神の像の前で祈りを捧げれば、賢者神と話することができます。

いつ僕が賢者神に本を贈ったの？ 意味がわからない。

しかも賢者神と話せる？

……とにかく教会に行ってみるか。



翌日、僕はクリス兄様と教会へお出かけです。

ポーナスポイントがもらえたこと、賢者神と話ができることを家族に話したら、また僕が倒れてもいけないからと、クリス兄様が付き添いとして一緒に行くことになった。

王都の教会は、領都の教会と違って柱や壁に装飾があり、窓からの光も内部によく入っていて明るい雰囲気だった。

僕はまず中央の創造神と豊穰神に祈りを捧げ、次に加護を持っている植物神にも祈りを捧げた。その後、メールで会話ができると言われた賢者神のもとへ行く。

賢者神の石像の前で跪き、加護をくれたことと、昨日のポーナスポイントのお礼を伝える。

そして、「お話ができると伺い参りました」と挨拶をした。

すると石像が突然キラキラと輝き始め、石像に似た若い男性が現れた。

石像よりもノリの軽そうな若者って感じがするけど、これが賢者神？

でも後光が差していて近寄りたいたい雰囲気があるから、やはり神様なのだろう。

男性が口を開く。

「やっと会えたね、リーンハルト。ハルトってこれからは呼んでいいかい？」

僕は「構いません」と答える。

「なかなか図書館に行つてくれないから、加護の内容が話せなくてヤキモキしたよ」

その後、男性——賢者神は加護の内容を、次のように説明してくれた。

最初は、どこの図書館でも館内なら本が速く読め、難しい本も理解できるようになる。

ランクアップ後は、王都図書館の本の内容を白紙の本に転写できるようになる。

加護の内容は僕の予測と合っていた。

読書や、賢者神が設定した行動をするとポイントが増え、基準に達するとランクアップするらしい。

ただ、現在の総ポイント数、ランクアップの基準は見られないそうだ。

数値を目的に頑張るのは賢者神のポリシーに反するらしく、また「ランクアップがいつ来るかわからないドキドキ感も面白くていいでしょ」と言っていた。

賢者神のおまけで、Eランクまでは早くランクアップできるようになっているらしい。

今は図書館で一部の本が閲覧できなくなっているが、それは僕の魔力量が上がれば解消されること。

ちなみに重複する本は統合されるようになっていそう。

なお、賢者神の図書室にない本を見つけた場合には、ポーナスポイントがもらえるようになっていそう。王都図書館の書庫に1冊あったそう。いったいどれだけの本を保有しているのだろう。

このポーナスポイントの仕組みとしては、僕が行った場所に賢者神の図書室にない本があったら自動的に賢者神に届くようになっていそう。

説明の最後に「行ったことのない図書館を見つけたら、一度は入ってね」と言われた。

僕は気になっていたことを尋ねる。

「夢の中で『転生した人が、一度は言いたくなるセリフはなーんだ』と言っていたのは賢者神様ですか？」

「そうだよ。『ステータスオープンと唱えよ』と言うよりも、なぞなぞの方が楽しいじゃないか。難しくはないなぞなぞだけだね」

賢者神に見えないこの人。

僕がそんなことを考えていると、賢者神が話し出す。

「あっ、だめだよ。賢者神っていったら生真面目で固いイメージを持たれがちだけれど、その先入観は良くないぞ」

心に思ったこと読めちゃうのか……神様だから……。

僕は素直に謝る。

「申し訳ありません」

「いいよ。あと1つだけ質問を受け付けるけれど、あるかな？」

僕が持つ3つの加護（1つはいまだ不明）は領地の樹海やホワイトドラゴンに関するものなのかを尋ねる。

すると、「加護についてはいずれわかる時が来る。君なら使いこなせると思っっているから」と曖昧な答えが返ってくる。

賢者神は言葉を継ぐ。

「今回のポーナスは僕と話せること。新しい本を見つけてくれた時も話せるから。教会にある僕の石像の前で祈ってよ。じゃあねー」

僕、いのように利用されているだけではないだろうか……。  
そのまま賢者神は姿を消した。

「ハルト、もう終わったのかい。では帰ろうか」

跪いていた僕が立ち上がったので、クリス兄様が教会を出ることを促す。

教会の前で馬車に乗ると、クリス兄様が口を開く。

「教会の見習いが仕事をしているふりしてハルトを遠くから見ていたんだ。あのままゆっくりしていたら、教会の上の方の人間が出てくる可能性があったから、急かしてしまった」

水魔法のコントロールがしっかりできるようなになれば、回復魔法の練習が始まる。そこで回復魔法のレベルが高ければ、教会から勧誘（囲い込み）があるだろうと言われている。

クリス兄様は僕が教会に目をつけられないようにしてくれたのだ。

実際、回復魔法の力が強い人は、貴族、庶民関係なく勧誘され、教会の治療院で働くことが多い。さらに浄化の力が強い人は聖人や聖女と呼ばれている。

我が国にも何人かいるそうだ。

聖人、聖女は他国からの依頼で、魔力だまり（スタンピードが起こるきっかけ）を浄化することもあるらしい。

我が国に聖人、聖女が多いのは、かつて大聖女様がいたためだと言われている。

今の聖人、聖女たちの先祖をたどれば、大聖女様の血筋に繋がるのではないかと噂されているが、本当かどうかは知らない。

いずれにしても、教会が力を持ち続けるために彼らに地位を与えて、こき使っているわけだ。

すでに、回復魔法の講師を派遣しようかと、父様宛てに手紙が来たそう。

丁重に断ってくれたらしい。

教会にこき使われるのも嫌だし、僕はウエストランドの領民や騎士団、魔法師団のために自分の能力を使いたい。

国の民のために力を使えと言われても、じゃあ自分たちが働けよと思う。

教会の人気取りのために利用されるのはごめん。

だから僕の好きないようにさせてくれる、家族や僕の周りのみんなには、本当に感謝している。

「賢者神とは話せたのかい？ 賢者神に祈っている時間は、他の神に祈っている時間と変わらなかったけれど」

クリス兄様の疑問に僕は驚いた。

「クリス兄様、本当ですか？ それなりに話していたはずですよ」

「……だったら、賢者神との会話中、周りの時間が止まっていたのかもしれない。神の力でね」

「次、話すことがあったら聞いてみます」

「えっ、また賢者神と話せるのかい？」

僕は賢者神との話をすべてクリス兄様に伝えた。なぞなぞの部分は除いてだけれど。

また、僕が持つ3つの加護についても話した。

「賢者神が否定しなかったということは、ハルトの3つの加護は樹海やホワイトドラゴンに関する可能性が高くなったね。ハルト、魔法の練習を増やした方がいい。来年の夏、ホワイトドラゴンと対峙するのかもしれない」

僕の話聞いたクリス兄様がそう口にした。

家に帰り、家族にも報告をした。

あわせてクリス兄様の見解も伝えた。

「以前、世界樹を来訪したクリスの学友たちにもレベルを上げるようにと神からのお告げがあったし、何かが樹海で起こる可能性が高いということだろう。樹海にはホワイトドラゴンも住み着いていることだし……」

父様もクリス兄様と同じ意見のようだ。

ジェラ兄様、母様が、来年の夏までにしなければいけないことを挙げていく。

「兄上と俺は、2つの魔法のレベルを両方とも30以上にした方が良さそうだ」  
 「樹海近くの村の領民の避難場所の選定、食料確保、誘導手順の確認。今のうちにできることはしておきましょう。杞憂で終わればそれでいいし、突然対応に追われ被害が拡大するより、よっぽどいいわ。対処できる時間を神からもらえたと考えましょう」  
 母様の言う通り、対処できるようにヒントと時間がもらえたと思った方がいい。  
 ちなみに、年末の王城で開かれるパーティーに両親は必ず出席しないとイケない。  
 そのため、ウエストランド領に戻るのには年明け早々になることが決まった。



宰相室に入ってきたルーズベルト・クロンデル公爵に、宰相である私は話しかける。

「どうでした、リンハルト君に会ってみて？」

宰相室のソファアに座ったクロンデル公爵が口を開く。

「宰相の君が会った方がいいと言うし、息子からも彼の名前がよく出るのですね。興味はあったよ。王都図書館の書庫の本を難なく読んでいたし、本の内容を理解できているようだ。書庫の本は大人でも難しい本ばかりなのだがね」

宰相である私は、執務席から移動して、クロンデル公爵の対面に座る。

「賢者神の加護の力か……」

私の呟きを聞いて、クロンデル公爵がソファアから身を乗り出す。

「えっ、何だそれ？」

リンハルト君には、図書館という加護があること。その加護の力で、王都図書館の本を読むスピードが速くなることを話した。

リンハルト君が王都図書館の本をどこにいても読めることを話したら、公爵は彼にまわりつくだろうから、それは言わないでおこう。

「そんなにいい加護を持っているのか、彼。なんで私にはないのだ？ こんなにも本を愛してやまないのに……」

公爵の話が長くなりそうなので、私は話の途中で尋ねる。

「彼はどんな本に興味を持っていたのですか？」

公爵の話だと、通常の原因ではない木の枯れ方に関して調べていたそうだ。だから回復魔法と呪浄化の本をすすめておいたということだ。

私は口を開く。

「さすがは王宮図書館長殿で、魔塔の長。助言が的確ですね。ウエストランド領から、樹海の一部が枯れたらしいと報告がありましたので、そのことを調べていたのでしょうか」

「もう彼と会うのはダメなのか？ 加護のこと詳しく聞きたいな。賢者神に祈れば、今からでも私に同じ加護をくれないかな……」

やはりクロンデル公爵はリンハルト君に興味を持ってしまったか。

「国王陛下が彼に会うことを禁止しています。それに、何度も偶然を装うのは無理がありますよ」  
クロンデル公爵は、自分の興味があることのためなら、労力を惜しまない人だからな。

どうにかして彼と話そうと画策しそうだ。

前回のリンハルト君の謁見にいなかったから会わせたが、そうするべきではなかったかもしれないな……。



僕が年明けすぐにウエストランドに戻ると知ったラファエルが、ブリジット、ディアンヌと4人で、ラファエルの家でお茶会を開きたいという手紙を寄こしてきた。

そして4人の日程が合った今日、僕は馬車でクロンデル公爵家の門を通っていた。

ラファエルの王都の屋敷——クロンデル公爵家は王城に近く、また敷地はウエストランド家が王都に持つ屋敷の2倍はありそうな広さだった。

門をくぐってからしばらく経つが、公爵家の屋敷が見えない。

王都の隣にあるクロンデル公爵家の領地は小さいが、ダンジョンが2つある。

1つは肉や魚がドロップ品のダンジョンで、もう1つが薬草や果物などが採れるダンジョンだ。

どちらも低ランクの冒険者たちが潜れるダンジョンなので、人気があり常に盛況のようだ。

別名、王国の食糧庫とも呼ばれている土地だ。

2つのダンジョンや領内の管理をしつつ、王城内の仕事をしている家らしい。

ようやく着いた屋敷は、前世で見たヨーロッパの宮殿っぽい。

いったい何百人住めるの？ っていうくらい大きい。維持費が大変そうだ。

現れた執事らしき人に、美しい庭が見えるガラス張りの部屋に案内された。

部屋には、ラファエル、ブリジット、ディアンヌがすでに待っていた。僕は声をかける。

「待たせたかな、3人も。1か月ぶりだね。元気にしていた？」

ブリジットが返事をする。

「私たちが今来たところよ。私がディアンヌを迎えに王城に行ってたから」

「ブリジットのおかげで来られたの。さすがに王家預かりの身で遊びに行きたいとは言えなくて」

ディアンヌがそう言った。

ラファエルが笑顔で僕らに話しかける。

「リンハルトがウエストランド領に戻る前に集まれて良かったよ。今日は楽しもう」

ラファエルは公爵家の嫡男という立場なのに気遣いが凄すぎる。急なお茶会の手配、大変だっただろうに。

ディアンヌが改まった表情で頭を下げた。

「改めて、みんなにはお礼を言わせてください。本当にありがとう。父が色々不正をしていたよう

で、私が伯爵を継いだ時には手遅れだったかもしれないと言われたわ。みんなのおかげで伯爵家を取り戻すことができました。まだ、私一人では何もできないけれど、助けてもらった恩は必ず返すわ」

ブリジットが笑顔で応える。

「ディアンヌ、私たちはきつかけを作ったにすぎないわ。これから伯爵家を立て直すのは大変だし、わたくしでは協力できることは少ないけれど、愚痴ぐらいは聞いてあげられるから、ため込んではダメよ」

「ブリジットが言うように助けが必要な時は言ってくれ。まだ僕らには力はないけれど、できることはするから」

ブリジットとラファエルの「協力する」という言葉は、ディアンヌにとって心強いだろう。

「僕の従兄のユベール兄様が、ガルダ領でお茶の改良とかに携わるみたい。素敵な兄様だから安心して相談していいよ」

ガルダ領はディアンヌの実家である。

僕の言葉にディアンヌが驚いた様子を見せる。

「えっ、ノーストレイド家の現当主の次男の方よね。リーンハルトの従兄なの？」

「そうだよ、母方のね。もともと新事業には関わる予定の人なんだ」

ユベール兄様は自分の魔法を活かした仕事をしたいという希望を持っていた。だから、僕がガ

ルダ家に頼んでみたらどうかとユベール兄様に提案したのだ。

僕が魔法の話をしたから、今度は自分たちの魔力属性の話題になる。

ラファエルは水と雷、ブリジットは水と風、ディアンヌは火と土、僕が水と回復魔法を使う。

それぞれの属性を知ったラファエルが言う。

「みんなバラバラだな。唯一、僕とリーンハルトの水だけが重なっている」

「バラバラな方が楽しいわよ。色んな魔法が見られて。それよりも自分の属性レベル、魔力量が見られるようになるって噂があるの。知っている？」

ブリジットがそうみんなに問いかけた。

それを聞いたラファエルが頷く。

「ああ、私も父上から聞いたよ。年末の王家のパーティーで発表されるらしくて、全貴族が参加するように招待状に書かれていたそうだ。ただ、父上が面白いことを言っていてね。発見したのはウエストランド家ではないかって。そうなのかい、リーンハルト？」

うげっ、まさかラファエルから聞かれるとは……。さすが公爵家、情報力が凄いな。

僕はごまかすことにする。

「そうなの？ 僕は父様から聞いてないからわからないな」

すかさずブリジットが質問してくる。

「リーンハルト、ウエストランド家の兄弟全員が従魔契約をしたと聞いたわ。本当なの？」

相変わらずブリジットの情報力も凄いな。それともこれが貴族では普通なのか？

「そうだよ。時期はバラバラだけれどね。それに生まれて間もない魔獣の雛ヒナや子供だけだ」

僕が答えると、従魔契約したきっかけを教えてほしいとみんなにせがまれた。

僕はしぶしぶ説明をした。

「リーンハルトの従魔はフェンリル。兄上たちの従魔はベンダールとフィアンマ。それが子供でも凄いことだ。そもそも従魔契約ができるなんて……聞いたことがないよ」

ラファエルが、凄いことなんだぞと強調してきた。

「ラファエルの言う通りよ。リーンハルトの従魔のフェンリルを見たかったわ。連れてくれば良かったのに」

ブリジットが残念そうに言っていると、ディアンヌが良いことを思いついたという顔をする。

「次に会う時は連れてきてほしいわ。無理なら、リーンハルトの王都のお屋敷で次のお茶会をお願いしましょうよ。それなら、他の従魔にも会わせてもらえるかも」

「ディアンヌ、いいアイデアだわ。次のお茶会は来年の冬になってしまうけれど、リーンハルトの王都のお屋敷でお願いしましょう」

ブリジットはディアンヌの提案に大賛成のようだ。

2人からのお願いに負けた僕は、来年の4人のお茶会を、王都の僕の屋敷であることを了承してしまった。

会話に加わらずに考え込んでいたラファエルが、「従魔に魔力をあげていると聞いたが、リーンハルトの兄上たちは従魔と同じ魔力属性なのに、リーンハルトだけ違うのは大丈夫なのか？」と聞いてきた。

あれ？ 確かにアトレの属性は水と風だ。僕は水と回復。

しかも僕、魔法が使えるようになってからアトレに一度も魔力を渡していない。

出会った頃に、アトレが「勝手にもらっているから大丈夫」と言っていたから忘れていた。

兄様やカイル隊長たちには同じ属性だからと、リプカやビアンカ、アルラウネに魔力を渡してもらっていたのに……。

ほんとなら、魔力属性的にはクリス兄様とアトレの相性がバッチリだ。

アトレ、ほんととはクリス兄様が良かったとか？ ……まったく気にしていなかった。

やばい……どうしよう、不安になってきた。

お茶会がお開きになり、手紙のやり取りをすることと来年の冬に会うことを約束して、クロンデール公爵家を後にした。

ラファエルからの質問でお茶会の途中から気もそぞろになってしまった。

今は早くアトレに確認したい。



王都の屋敷に帰ってきた僕は、自分の部屋に入るなり「アトレ」と呼ぶが、アトレはいない。あれ、どこに行ったの？

焦る僕に、侍従の少年ジョルジュが「庭でリプカ様やビアンカ様といますよ」と、窓から指を下に向けながら教えてくれた。

僕はジョルジュの話を聞くなり、部屋を飛び出し庭へ向かった。

「アトレ」

僕はアトレに駆け寄る。

「アトレは僕とまったく違う魔力属性なのに、僕と従魔契約して良かったの？ それに僕、魔法が使えるようになってから、アトレに一度も魔力を渡していないよね。『勝手にもらっているから大丈夫』と言われて、すっかり忘れていたんだけれど」

僕はアトレにそう捲し立てる。

アトレは僕の勢いにびっくりしたようだったけれど、質問に答えてくれた。

属性は違うけれど、神の加護を持っている僕の魔力は気持ちがいいとのこと。

また、魔力調整が上手くできない僕から直接もらうより、自分から吸収する方が楽なことも教えてくれた。

魔力調整がちゃんとできるようになったら、直接もらう方が僕の魔力量の減りが少なくなるので、その時に言おうと思っっていたらしい。

「魔力量の減り具合なんて今まで考えたことなかった」

僕は魔力をアトレにあげていることで、魔力量の減りが激しく、その分人よりも増え方が早いらしい。魔力量は自然回復する際に、総量が少し増えるようだ。

ただ、アトレも大きくなると必要な魔力量が増えるし、僕自身が魔力を使うことも増えてくるだろうから考えた方がいいと言われた。

うっ、アトレに諭されるなんて……。

アトレたちが遊んでいるところがよく見え、庭に出られるドアがある1階の部屋にクリスマス様とジェラ兄様がいて、僕の慌てている様子をしっかりと見ていた。

僕は部屋に入って、ジェラ兄様たちのもとへ向かう。

「あははは、ハルトが慌てふためいているから何事かと思ったら、今更そんなことを聞くなんて……」

ジェラ兄様が近づいてきて、僕の背中を叩きながら笑った。

ジェラ兄様、面白いことなんかありませんよ。

僕は背中が痛いのでジェラ兄様の手から逃れるように距離をとる。

クリスマス様が質問をしてくる。

「アトレには何で言われたのかい？ あと気にしてなかったことを急に何で聞こうと思ったの？」僕は今日のお茶会で「そういうえば……」となったことと、アトレから言われた内容を話した。

「アトレに諭されたんだ。クツ、クツ」  
笑いをこらえられていませんよ、クリス兄様。僕は口を尖らせた。  
ジェラ兄様が僕に声をかける。

「まあ、解決したみたいだし、兄弟でゆっくり話す時間もあんまりないからさ。今からハルトも一緒に過ごそう」  
クリス兄様が頷く。

「ジェラの言う通りだよ。年明けには2人ともウエストランド領に戻ってしまうし、そうすれば来年の夏まで、私は会えないと思うからね」

アトレ、リプカ、ビアンカが遊んでいるのを見ながら、僕たち兄弟は楽しく話をして過ごした。



年初までの空いた時間で僕は読書三昧のゆったりした時を過ごせた。

そして、両親から年末の王宮のパーティーの様子がどうだったのかの話聞いた。

パーティーの途中で自分たちの魔力レベル、魔力量の見方が発表されたく、そこからはパーティーどころではない騒ぎになったらしい。

呪文を唱えるだけという簡単さだ。聞けばすぐにやってみたくなる。そこからは魔力レベルや魔力量の自慢や比較が始まり、喜怒哀楽入り乱れて大変だったとのことだ。

## 第2話 エミニーラダンジョン

年が明けると、僕たちはウエストランド領に戻った。

クリス兄様に会えたり、友達ができたりしたのは嬉しかったけれど、僕は王都よりやっばりこちらの方が好きだ。

賢者神の加護「図書館」で本が読み放題になったし、春までのんびり過ごそうと思っていたのだが……僕とジェラ兄様は父様に呼ばれて書齋にいる。

僕たちを呼んだ父様が口を開く。

「騎士団の魔力レベルや魔力量について調べたが、カイル隊長の班の者だけ鑑定結果の備考欄に『魔法師は夏までに魔力レベル40になること。剣が得意な騎士は夏までにミスリル剣を保持し、使いこなすように』と書かれていた」

レベルを上げなければならぬということは、武力が必要な何かが起こるとのこと……。

今年の夏、異変が起こるのかな？

賢者神も否定はしなかったし、起こるとしたら、やはりホワイトドラゴンが住み着いた樹海の可能性が高そうだ。

そして僕たちはその異変と立ち向かわないといけないことだろう。

僕とカイル隊長は、樹海に行く時はいつも行動を共にしている。そして僕には意味深な内容不明の加護もある。だから、僕が樹海に行くことは確定なのかと思っていると……。

ジェラ兄様が父様に尋ねる。

「父上、ミスリルを全員分用意できるのですか？」

「いや、全員分はないから、素材を集めにダンジョンに何度か行くことになる。お前たちも行きなさい」

僕は父様の言葉に驚く。

えっ、ダンジョンですか？

ジェラ兄様が頷く。

「なるほど、カイル隊長の部隊ばかりが、何度もダンジョンに行っていると怪しまれる。ハルトの護衛ってことにすれば、怪しまれることもない」

ジェラ兄様は理解したようだ。

僕がダンジョンに行きたいとこねているように周囲に見せたいと言うことですね。

まあ、樹海にいるホワイトドラゴンのことを、領民や他の貴族に知られるわけにはいかないしなあー。



そんなわけでやってきました、初ダンジョン。

領都からは離れているが、馬を飛ばせば半日で着くみたい。でも僕がいるから1日かかった。

最近、僕は1人で馬に乗っている。

馬上の時、アトレは僕の抱っこバッグの中にいて、休憩になったら周辺を走り回っている。

今日はダンジョンに一番近い街、エミニーラで1泊することになった。

エミニーラはダンジョンが近いから、鍛冶工房や貴金属工房が立ち並ぶ。

また、ダンジョン目当ての冒険者や買付かひひにやってくる商人のための食堂や商店、宿泊施設が充実していて賑にぎわっている。

領都に次ぐ大きさを8万人が住んでいる街だ。

明日から2泊3日でダンジョンに行く予定だ。

僕は明日に備えて宿の部屋で大人しくしている。アトレとリプカも一緒だ。

翌朝、街の門の入り口でカイル隊長とその隊員32名、ジェラ兄様、僕は3台の荷馬車に分かれて乗り込みダンジョンの近くまで行く。

この荷馬車はダンジョンとこの街を行き来する定期便で、帰りはダンジョンからこの街へ帰る人

を乗せるそうだ。

僕たちが乗ってきた馬はこの街に預けるらしい。

ダンジョンまでの道は整備されているので揺れはそこまでひどくなかった。

荷馬車にはカイル隊長もいたから、僕はカイル隊長の横に座って小声で尋ねる。

「カイル隊長の石板の備考欄には、班の隊員と同じことが書かれていたの？」

「そうです」

カイル隊長は何でか嫌な顔をした。石板に触れてほしくないこと書かれてあったのかな？

「ねえ、何か書かれていたのでしょ？ 嫌な顔するってことは」

周りにも聞こえる声で、僕はカイル隊長に詰め寄った。

「いいえ、書かれていません」

カイル隊長は無表情で否定してきた。

「マイヤー何か知っている？」

矛先を変えてマイヤーに聞くと、笑いながら「言えません」との返答がある。

やっぱり何か隠しているな。

父様に聞くからいいよと僕が言うと、カイル隊長はしぶしぶ教えてくれた。

「称号・世界樹とアルラウネを助けし者」と書かれていたらしい。

本当のことだから隠すことではないでしょって思ったけれど、カイル隊長的には僕に言われるま

まに行動しただけなので、助けた感じがしなく大袈裟おおげさに感じるようだ。

本当にそれだけ？ と思ったけれど、「到着したようですよ」とマイヤーから声をかけられたの

で追及はできなかった。

たどり着いたのは、エミニーラダンジョンがある山の麓ふもとの建物の前。

冒険者ギルド、宿泊施設、食堂が一体になった建物だ。

ダンジョンに行くには、冒険者ギルドで申請をしないといけないらしい。

ダンジョンの入り口で冒険者ギルドでもらうメダルを渡さないと、入ることはできないとのこと。

エミニーラダンジョンは鉱物資源とが採れるダンジョンだ。

我が国最大のダンジョンで、現在24階層までは攻略済み。

最後の階層まで到達した人は今のところいない。

浅層では鉄と銅が、12階層から銀、金、プラチナなど貴金属、21階層からはエメラルド、サファ

イヤ、ルビー、ダイヤモンド、ミスリルなどといった高価な貴金属が採れる。

このダンジョンは全ランクの冒険者対応型のダンジョンだが、ランクごとに行ける階層が決まっ  
ている。

Gランクは2階層まで、Fランクは4階層まで、Eランクは8階層まで、Dランクは13階層ま  
で……という感じだ。

僕はGランクだけれど、同行者の騎士がみんなBランク以上なので11階層までは行っていいそ

うだ。

ちなみに僕がFランクになってもみんなと一緒にに行けるのは11階層まで。Eランクになると15階層まで行けるようになる。

僕たちのグループは、僕とジェラ兄様について浅層から行くメンバーと、21階層から行くメンバーに分かれる。

ミスリルが採れるのは22階層のボス部屋以降だからだ。

20階層までで一度でも攻略した階層は飛ばすことができるが、21階層からは毎回挑まなくてはいけないそうだ。

僕とジェラ兄様が冒険者ギルドで手続きを待っていると、「ハルト」と呼ぶ声がする。

振り向くと、カナルが走ってこちらに来ていた。

それを追いかける大人が5人見える。

「あれっ、カナルと『黄金の翼』のメンバーが何でここにいるの?」

黄金の翼は、リーダーのセーラムさんが率いる男女5人組のパーティだ。

カナルが言うには、黄金の翼が請け負っているシナーナ村への護衛や、森に潜む<sup>ひそ</sup>ゴブリンやオーク討伐の手伝いをしていたようだ。

黄金の翼から「ご褒美は何がいい?」と聞かれたから、ダンジョンに連れてきてもらったとの

こと。

「だって、ハルトがダンジョンに行くって言うていたからさ。俺も行きたいなって。まさか同じ日になるとは思ってたかった」

カナルがここにいる理由を教えてくれている途中で思いついたことがあったので、僕はセーラムさんに話しかける。

「……セーラムさん、僕をセーラムさんたちのグループに混ぜてもらおうことってできますか? 僕とカナルがいたら大変かな?」

「いいえ、今回は浅層しか行きませんので大丈夫ですが……護衛の方々がいらっしやいますから、皆さんもということですか?」

「僕の思いつきだから、ちょっと確認してきますね」

僕はジェラ兄様と一緒に、カイル隊長のところへ行く。

カナルの付き添いで、黄金の翼というBランクの冒険者パーティが、これからダンジョンの浅層に行くことを話す。

そして、僕も冒険者パーティと一緒に行動すれば護衛を減らせて、上層に行く人を増やせるのではないかと説明する。

「信用できる人たちか?」とカイル隊長に問われる。

以前、父様の了承を取って、魔法師団長の実技練習に参加した冒険者パーティだと答えた。

ジェラ兄様が口を開く。

「カイル隊長、ハルトの案はいいと思うぞ。ミスリルは多く持ち帰りたいし、ダンジョンに来る回数は減らしたいからな。黄金の翼はハルトのことも知っているし、俺も17階層までは何度か行っているから大丈夫だ」

「わかりました。騎士4人をジェラルド様とリーンハルト様につけましょう」

ジェラ兄様の後押しもあつてか、カイル隊長は了承してくれた。

僕、ジェラ兄様、アトレ、リプカと騎士4人は、カナルと黄金の翼と一緒に浅層に行くことになった。

僕たちに行きするのは、いつも僕のそばにいるマイヤー、ウィルソンに加えて、ミック・ハミルトンとラウル・カムエラという騎士だ。

ハミルトンとカムエラは土魔法と剣が得意なのだから。

全員が集まると、僕はジェラ兄様たちにカナルと黄金の翼を紹介する。

それを聞いたマイヤーが呟く。

「アークランド魔法師団長の甥っ子さん、Bランクの冒険者パーティですか」

その組み合わせに疑問を持ったようだ。

カナルが、僕と一緒にアークランド魔法師団長から魔法を習っていること、黄金の翼とは父親が商品を卸しているシナーナ村までの護衛依頼で出会ったと説明をする。

僕も黄金の翼と一緒に魔法の練習をしたことがあると付け加えた。

そのままお互いの自己紹介が終わったところで、ダンジョンへ向かう。

ダンジョンに入るとそこは部屋になっていて、中央に水晶玉が鎮座している。

奥には大きな扉もある。

この扉はダンジョンからの出口となっていて、こちら側からは入れない。

そして、この部屋はダンジョンの10階層にあたるようだ。

なんでもこのダンジョンは山の中腹から1階層が始まり、そこから下に潜っていくらしい。

そしてダンジョンの入り口と呼んでいる場所——山の麓が10階層になっていて、11階層からは地下だそう。

1階層には、部屋にある水晶玉を使って転移で移動する。

行ったことがある階層であればどこにでも転移できるようだが、僕は初めてのため、1階層にしか飛ぶことができない。

階層ごとで趣が違うため、地下とはいえ、到底地下には見えない階層もあるとのこと。

僕のグループとカナルのグループは別々に1階層に転移する。

転移した場所は大きな扉の前だった。

カナルたちも転移してきたため、カナルと一緒に大きな扉を開けると、そこには森が広がって

た。僕たちが今いる場所は魔獣に襲われないセーフティゾーンで、森に入るとゴブリンに遭遇するそうさ。

「ハルト、やっと一緒に行けるな。負けないぞ」

「カナル、僕も負けないよ」

カナルと僕はお互いに初ダンジョンだから、テンション高めである。

1階層と2階層は森になっていて、現れるのはゴブリンのみ。

ゴブリンの見た目は小鬼こおにっぽく、身長は1メートルもない。1体1体は弱いけど、樹海だと50体以上が集団生活していることが多いから、油断できない相手である。

1階層で遭遇するゴブリンは一度に5体前後。2階層では10体前後になるそうさ。

ゴブリンに遭遇したら、僕とカナルが1体は倒し、残りはジェラ兄様たちが対応することに決まった。

早速森に入ると、ゴブリンが現れる。

僕とカナルは水魔法のウォーターボールでゴブリンを倒していく。

すべてのゴブリンを倒した後に出てきたのは、錆びたナイフ5本だった。

どうやらドロップ品のようだ。

あと何回遭遇するかわからないが、1回の遭遇でドロップ品が錆びたナイフ5本って、割に合わ

ないのではないかな？

僕が疑問を口にしたところ、セラムさんが教えてくれる。

1階層を奥まで進むとゴブリンとの遭遇は多くなり、ドロップ品の数も増えてくるらしい。

この1階層の森は一本道になっていて、左右から突然ゴブリンが飛び出してくることに繰り返しだった。

2時間ぐらい歩き続けると、大きな木の下で数組の冒険者パーティが休憩をしていた。

セーフティゾーンのように。

「この調子で進めば、1時間ほどでボス部屋につきそうさ。ボス部屋はホブゴブリン3体だ。ハルトとカナルで1体ずつ倒したとして、あとの1体はどうする？」

ジェラ兄様が、僕とカナルに確認してきた。

ホブゴブリンは身長150センチ前後のゴブリンを統括するボスだ。

力はゴブリンよりも強く、Gランクの冒険者だと手こずる相手だ。

カナルが話しかけてくる。

「ハルト、俺たちで3体倒そうよ」

「僕もできそうならやってみたいな。ダメかな、ジェラ兄様？」

僕はジェラ兄様をお願いした。

そこでアトレが口を開く。

『ハルト、ボクが残りの1体を倒したい』

「えっ、アトレ、ホブゴブリン倒したいの？ 魔法を使っているところ、ほとんど見たことないけれど大丈夫？」

アトレが言うには、あまり使っていないから参加して鍛えたいそうだ。  
確かにアトレとリプカはダンジョンを楽しみにしていたな。

アトレは樹海に行ったら走り回っているから、普段は遭遇した魔獣を倒しているのかもしれない。ダンジョンは始まったばかりだ、無理をしないでいこう。ということで、アトレに3体目を任せることになった。

順調にゴブリンを倒しながら森を進むと、突然大きな扉——ボス部屋が現れた。

その扉の前で5組ほどのパーティが待っていた。

順番を待っている間、黄金の翼のアリーさんが僕たちに聞いてくる。

「誰がどのホブゴブリンを受け持つか決めたのかしら？」

「俺が左、ハルトが中央、アトレが右だよ」

カナルの緊張感がない返事に苦笑いしながら、黄金の翼のグレゴリーさん、ウィルさんも話に加わってくる。

「全然緊張感がない初ダンジョン組だな」

「まあ、1階層は心配ないよ。この2人なら」

セーラムさんはリーダーらしい言葉を僕たちに掛ける。

「2人とも、何が起こるか分からないから油断するなよ」

「そろそろ順番が来るみたいだ。みんな行こう」

ジェラ兄様の言葉で、みんな、ボス部屋の扉の前に移動する。さらにジェラ兄様は、ボス部屋に入る際のルールを教えてください。

「ハルト、カナル。この扉が青く光った時は、すぐにボス部屋に入れる。これはどの階層のボス部屋でも同じだから覚えておきなさい」

「はっ」

「扉が青くなったら、お前たちのタイミングで扉を開ければいい。俺たちは後ろで見ているから」しばらくすると、扉が青く光り出す。

僕はカナルと顔を見合わせ頷き合う。

アトレにも準備はいいかと聞くと『大丈夫だよ』と返ってきたので、僕とカナルで扉を開けた。ボス部屋の中は岩肌のようになっていて、どこにホブゴブリンが隠れているかわからなかった。しばらく待つけれどホブゴブリンは出てこない……。

なぜ？ と疑問に思った瞬間、ホブゴブリン3体が飛び出してきた。

僕は慌てて水魔法のウォーターボールを放つが、避けられてしまう。

さらに慌てた僕は、ビッグウォーターボールをホブゴブリンの顔に当て、顔を水で覆って息がで  
きないようにした。

息ができないホブゴブリンは転がりまわって、やがて動かなくなった。  
アトレとカナルの方を見ると、すでにホブゴブリン2体を倒していた。

ボス部屋でのドロップ品は、鉄の粒が入った小袋3つだ。

また、ボス部屋には先ほどまではなかった扉が出現していた。

扉を開けると、目の前には下へ続く階段と、水晶玉が鎮座している。

この水晶玉を使うと、同じ階の入り口か、10階層の出口に行くかを選べるらしい。触ってただ念  
じればいいとのことだ。

そして、階段を使うと次の階層に進める。

これはどの階層でも同じだろうだ。

「このボス部屋は、通称フェイント部屋と呼ばれていて、ボスはすぐには襲ってこないのです。ホ  
ブゴブリンが出てこないなどと思って集中力が途切れた瞬間に飛び出てきます」

2階層に進む階段を下りながら、セーラムさんが僕とカナルに、ボス部屋の仕組みを事前に教え  
てしまうと実践練習にならないと思黙っていたと教えてくれた。

アトレはフェイントにも動じず、氷魔法のアイスボール一撃で倒したそうだ。

見たかった、アトレの雄姿!!



カナルもウォーターボールをホブゴブリンの頭に向かって数発撃って、倒したそうだと。僕が一番慌てふためいていた。

カナルから「毎月シナーナ村への往復の道中か、村の近くの森でゴブリンに遭遇するから慣れだよ」と言われた。

僕はいつも練習だけで、実戦経験はほとんどないからなあー。

今回、カナルと一緒にダンジョンで行動できてよかったと思った。

2階層に着いた。

これも森だが、1階層より木々が密集していて、見通しは悪くなっている。

2階層は、1本道に分かれ道や行き止まりが追加され、さらに四方八方からゴブリンが10体前後現れるようだ。

ドロップ品は鉄粒が入った小袋らしい。

「ピー、ピー、ピー」

リプカがアトレとジェラ兄様に一生懸命何か伝えていた。

「アトレ。リプカは参加したいと言っているのであつていいか？」

ジェラ兄様の確認に、僕はアトレがそうだと言っていると伝えた。

リプカの体毛はまだオレンジ色の羽や産毛が多く、成長したフィアンマのような朱色しゅいろにはなつて

いない。

だから本当に大丈夫なのか？ とアトレに聞くと、ゴブリンぐらいいは大丈夫との返事がある。

どうやらリプカも魔法の練習がしたいようだ。

2階層での方針も決めていく。

分かれ道でどちらに進むかは僕とカナルで決める。

現れるゴブリンのうち数体は、僕とカナルがウォーターボールを連射して倒す。そこにアトレと

リプカも参加する。

そして、僕たちが倒せなかった残りは、ジェラ兄様たちが交代で倒すことになった。

森の中を、アトレ、リプカ、僕、カナル、セーラムさんを先頭にして歩いていく。

カナルの横にいるセーラムさんに、僕は話しかける。

「セーラムさん、分かれ道のどちらが行き止まりとかつて覚えているのですか？」

「ずいぶん前のことなので覚えていませんね。Gランクの頃は毎日のように来ていたので覚えて

いましたが……」

「そうなんです。ゴブリンが出てくるのは毎回同じ場所なんですか？」

「いえ、違います。だから気を抜かないでくださいね」

カサカサと音がしたので戦闘態勢を取ると、周囲からゴブリンが7体出てきた。

僕とカナルがウォーターボールを連射する。同時にアトレはアイスボール、リプカは火魔法の

ファイヤーボールを放って、ゴブリン7体を全部倒していく。

このまま、僕、カナル、アトレ、リプカで、ゴブリンを倒すことになった。

僕はセーラムさんに、分かれ道は見分け方があるのか？ と尋ねたが、「ないです」とのことだった。

どうやら運に任せるしかないみたいだ。

分かれ道で不正解だった場合は結構歩かないと行き止まりにたどり着かないらしい。しかもゴブリンも出るので体力の消費と時間のロスになるそうだ。

少し歩くと二又ふたまたの分かれ道が現れた。

正直まったくわからない。

だから、僕とカナルは自分が行きたい道を「せーの」で指差すことにした。

僕が右で、カナルが左の道を差した。

僕たちの意見が分かってしまったので、アトレとリプカにどちらに行きたいか聞いたところ、アトレは『左』と言い、リプカは羽で左の道を差す。

今回は僕の意見が負けた。

左の道に進み、現れたゴブリンを順調に僕たちだけで倒していく。

また分かれ道が出てくる。今度は3つの道に分かれている。

進んでいた道はあっていたようだ。

僕とカナルは最初と同じように「せーの」で行きたい方向を指さず。僕が中央、カナル左の道を差した。

今回もアトレ、リプカに聞くと、アトレは『右』と言い、リプカは羽で右を示す。

今度は見事に分かれてしまった。どうしようか？

するとカナルが、アトレたちの選んだ「右」にしようと言う。アトレとリプカの魔獣の直感を信じた方がいいと主張したのだ。

カナルの意見を採用して、僕たちは右の道を進んでいく。

カナルの主張はあっていたようで、また分かれ道にたどり着いた。

僕たちはその後も分かれ道が来るとアトレとリプカに聞いて進み、一度も行き止まりに当たらずに2階層のボス部屋に着いた。

ボス部屋の前では2組の冒険者パーティが待っていたので、休憩をとることになった。

「これがSとAランクの魔獣の力なのね。ずるくない？ と言いたくなるけれど羨ましいわ」

アリーさんがアトレとリプカの活躍を見て、羨ましげにする。

「私たちがっているのかしら？ 過剰戦力よね」

黄金の翼のメンバー、リンカさんの眩きに、同じくメンバーのウィルさんとグレゴリーさんが反応する。

「3階層からは、俺たちも加勢しないといけないと思うよ」

「カナルはゴブリンには慣れてるけど、このボス部屋ではさすがに加勢が必要だろう」

僕、カナル、アトレ、リプカは現在作戦会議中だ。

2階層のボス部屋のホブゴブリンは平均10体前後いるらしいから、何体自分たちで倒せるか話し合っているところだ。

僕とカナルはウォーターボールの連射で倒せるか、まず試してみることにした。だめならビッグウォーターボールの水の膜で、ホブゴブリンの顔を覆うつもりだ。

アトレとリプカもまだやれると言うので、僕たちはホブゴブリンを1人1体は倒すことを目標にした。

あとの6体は大人たちにお任せする。まだまだダンジョンは続くから、無理はしないことにしたのだ。

僕たちの順番になり、ボス部屋の扉を開けると10体のホブゴブリンが見える。

部屋の中央で5体ずつの横2列で待っていて、扉が閉まるなり僕たちに向かって突進してきた。僕たちは自分たちの真正面にいるホブゴブリンに向かって魔法を放つ。

僕のウォーターボールは避けられたが、連射だったので2、3発目は連続してホブゴブリンの顔と左胸に当たる。そのまま態勢が崩れたホブゴブリンに引き続きウォーターボールを連射して倒

した。

カナル、アトレ、リプカを見ると、みんなすでに1体倒していた。

残りの6体はジェラ兄様、マイヤー、ウィルソン、アリーさんといった魔法が得意な4人が対応してくれる。

ボス部屋のドロップ品は鉄の粒が入った大袋5個だった。

3階層からは、一度大人たちが魔獣を倒すのを見学してから、僕たちが戦闘することになった。

3階層で現れる魔獣はハリネズミに似ていて、サイズが40センチほどのアグツパ。体が棘とげに覆われており、それを敵に飛ばしてくる。

厄介なのがこの棘に刺されると、刺された箇所周辺がしばらく痺しびれることだ。

最初は10匹ぐらい同時に現れて、奥に進めば進むほど数は増えていき、最後は100匹ぐらいが一斉に攻撃してくるそうだ。

いかに棘を防ぎながらアグツパを倒していくかが、この階層の攻略の鍵になる。

3階層は乾燥した土地で、大きな低木がポツポツと生えている平原だった。

道はなく、ボス部屋を探しながら進んでいくだけみたいだ。

10分ほど歩くと先頭を歩いていた黄金の翼が止まり、前方を見るようジェスチャーをする。

最初は黄金の翼が、アグツパを倒す方法を見せてくれるようだ。

100メートルほど先に小さい生物がいるのがわかった。あれがアグツパらしい。

アグツパの攻撃は20メートルぐらいまで近づくと飛んでくる。

僕たちは50メートルぐらい手前で、黄金の翼の対応を見学する。

黄金の翼がアグツパに近づくと、10匹ほどのアグツパが一齐に棘を飛ばしてくるが、リンカさんが発動した透明な防御壁にはね返されて地面に落ちる。

この防御魔法は回復魔法に属している。

リンカさんの防御壁が解除されると、男性3人が接近して剣でアグツパたちをあつという間に倒して、戦闘が終わる。

ドロップ品は、厚みがある5センチほどの10枚の鉄板で、1匹につき1枚ドロップするようだった。

アグツパは一度棘を飛ばすと、その棘の再生に10分ほどかかるので、その間に倒すのがコツらしい。棘以外は攻撃手段がなく、棘さえ防げれば倒すのは難しくないとのことだった。

僕はカナルに尋ねる。

「カナル、土魔法で壁ってできる？」

「いいや、まだ無理。壁の修復はできるようになったけれど……」

壁かー。水で壁を作るとかはできないのかな？

僕が、水が流れ落ちているところを繰り返し頭の中でイメージしていると、目の前に下に向かっ

て流れる水の壁が現れた。

「うわっ」

僕が驚いて声をあげると、水壁はぐしゃっと潰れて消えてしまった。

あれ？ なんかできたぞ。

「ハルト、今の何？ どーやったの」

カナルが僕に問い詰めてきた。

僕が水壁のイメージの話をする、カナルは「俺もやる」と言っ水壁にチャレンジする。

一瞬壁みたいなものができたが、それはすぐ消えた。

何度か練習するも、現れてはすぐ消えてしまう。

「絶対できるようになってみせるからな!!」

カナルは悔しがりながら僕に向かってそう宣言した。

水魔法の壁でアグツパの棘が防げるかどうかは、黄金の翼も騎士団も知らないらしく、一度試してみることになった。

ただし防げなかった時のことも考えて、僕の水壁の後ろでリンカさんが防御壁を作ってくれて、二重の壁で臨む。

今回、僕は壁を作るだけでアグツパを倒しはしない。カナル、アトレ、リプカで倒すことが決まった。

しばらく前へ進むとアグツパに遭遇したので、僕は水壁を作る。

アグツパが放った棘は、水壁に当たると水と一緒に流れ落ちていき、防ぐことができました。それを確認したカナル、アトレ、リプカが一斉に魔法を放ってアグツパを倒した。

「なぜ私は水魔法の使い手じゃないのかしら……水魔法って色々できて楽しそう」

羨ましげにそう言ったアリーさんが、何かを思いついたのか突然僕に突進してきた。

「リーンハルト様、この前聞いたもの以外で今使えそうな水魔法ってないですか？」

「氷の壁とか？」

「氷で壁作れるのですか？」

お互いが質問を質問で返す。

アリーさんに詳しく教えてほしいとねだられ、僕は「アイスボールができるのなら、壁もできるはず」と答えた。

アイスボールはとても硬い氷の玉だから、それを広げて壁にするイメージだよと説明する。

僕の説明を理解したアリーさんが「アイスウォール」と唱えて何回か繰り返し返していると、分厚い氷の壁が現れた。

「次は私が壁を作ります」と、アリーさんが嬉しそうに言ってきたので、僕たちはアリーさんの氷の壁を盾にしてアグツパを倒した。

「次は私にやらせてください」

今度は騎士のウィルソンが、水魔法で僕と同じ水壁を作ると立候補した。

僕はウィルソンに問いかける。

「水壁はやったことないよね？」

ウィルソンは僕たちが戦っている間に後ろで練習して習得したらしく、さっそく試したいとのことだった。

「ハルトたち、次は休め。こっちにも少しはやらせろ」

ジェラ兄様に言われて、僕たちは見学に回った。

そのあとは、僕、アリーさん、リンカさん、ウィルソンの4人で順番に壁役になり、順調にアグツパを倒してボス部屋に着いた。

土魔法の使えるハミルトンとカムエラは、「出る幕なかったですね」と残念そうにしていた。

ボス部屋の前まで来て、今日はここでダンジョン探索は終了。

ダンジョン内は暗くならないため時間の感覚がおかしくなるが、もう夕方らしい。

このまま外に出てもいいが、ダンジョン内での寝泊まり体験のため泊まることにした。

ボス部屋の前には魔獣が現れないため、ダンジョン内でも安心できる場所だとか。

確かに周囲にはテントがいくつかあるから、不思議だったのだ。

騎士団やジェラ兄様は懐中時計を持ってきているからわかるが、低い階層の冒険者だと、高価な

立ち読みサンプル  
はここまで

懐中時計を持っていないはずだ。

どうやって時間を判断しているのだろう。

不思議に思った僕は、隣にいるジェラ兄様に尋ねる。

「ジェラ兄様。なぜ冒険者たちは、今が夕方だとわかるの？」

それは冒険者ギルドカードの色で判別しているそうだ。

なんでも、夜になるとギルドカードは青っぽい色になり、朝になると普通の色に戻るらしい。

首にかけている僕のギルドカードを取り出すと、確かに少し青っぽくなっていた。

冒険者ギルドカードは身分証明にもなるし、ダンジョンでも樹海でも必須のようだ。

僕は、樹海では騎士たちに守られていたから、今回初めて知った。

このギルドカードはネックレスになっており、プレート部分が魔導具の一種で、そこに自分の名前が書かれている。

最初の発行時は安く手に入れられるが、失くすと再発行時にとんでもない金額を請求されるらしい。

大事にするようにと、ジェラ兄様に念を押されている。

黄金の翼はBランクだけあって、懐中時計を持っている。

時間を確認しながら進んで、いつ休むかを決めているそうだ。

僕たちはテントを3つ張れる場所を探す。

奥にはなるが、スペースを見つけたのでテントを張る。

僕とカナルもお手伝いをした。

黄金の翼は男性陣と女性陣でテントを分けていて、僕たちは6人で1つを使う。

僕たちのテントは、中が見た目以上に広くなっている魔導具のテントらしい。

夕食はオークの肉とピーマン、玉ねぎなどを串に刺してバーベキューだ。味付けは塩と胡椒。

ダンジョン内では豪華な食事みたいだ。

夕食を食べながら、セーラムさんに冒険者について聞く。

ここにいる冒険者の食事はパンと干し肉が多い。

ドロップ品を多く持ち帰るために、見た目以上に物が入る魔法のバッグ——マジックバッグに入れるものは最低限にするためだとか。

マジックバッグの容量が大きいものは高額だ。

駆け出しは、容量が小さい中古品を持っている人がほとんどだそうで、中古のマジックバッグも借金をして購入している可能性が高いとのこと。

1階層から4階層で活動している冒険者は、何日間かダンジョン内で過ごしてドロップ品を集め、冒険者ギルドで換金して1日休む。それを繰り返すようだ。

ボス部屋を攻略すればダンジョンからは出られるが、宿泊代もかかるし、ドロップ品が少ないと採算が合わないらしい。